



朝日新聞
04(H16). 4. 30

私の視点

「戦争」の歴史のなかで事件が起きた。日本という国を「敵」と見なしたイラクの武装勢力が、市民は「敵」とはしなかったのだ。高遠菜穂子さん、郡山総一郎さん、今井紀明さんの日本人3人を拘束した行為は許されるものではない。しかし、武装勢力が国家と市民を区別して扱ったことは記憶しておきたい。

高遠さんと今井さんはNGO、郡山さんも民間のカメラマンで、いずれも国家

を背負う立場にはない。NGOは読んで字のごとく「非政府」の組織。そこで動く市民は国家の代表ではないし、代弁もしない。

仮に人質が国家を背負う人だったら事態は別の展開をみせたかもしれない。現に、日本政府の外交官は殺害されている。

◆人質事件

国家と区別 市民を解放

戦争は国家と国家の争いである。これまで国家に所属する国民は、敵対した国家の国民から、自動的に「敵」と見なされた。イラクの敵となったアメリカの国民は、世界のどこにいても、テロリストの標的になる危険にさらされている。アメリカという国家は太平洋戦争の最中、日系アメ

リカ人を、アメリカ市民であるにもかかわらず、「敵性外国人」として強制収容所に拉致し、拘束した。当時のアメリカは国家と市民を区別しなかった。

高遠さんらにとつて、イラクの市民は敵ではない。解放された後「また行きたい」「イラクの人たちを嫌

いになれない」という発言が出るのも理解できる。市民と市民の関係だからだ。なのに、彼らはうなだれて帰国した。韓国の東亜日報は20日付でこう書いている。「手錠をしないだけで、彼らの様子は海外から移送された犯罪人と変わりがなかった」。そう、3人は国家の「囚人」として戻ってきた。

23日付の朝日新聞で日本紛争予防センター会長の明石康さんは、家族が政府に救出を要求した点について「政府とは異なる目的で行動しているはずの個人が、危機状況では政府に頼るといふ日本の構造が残っている」と批判している。

私たちの危険もまた、政府の行動のせいだ、高まっている。テロのグローバル化のおかげで、国外、国内を問わず、日本人だというだけで、危険がふりかかってくるかもしれない。

しかし、決して謝罪などしないではない。あなたたちは被害者でこそあれ、何一つ悪いことをしていないのだから。私たちはあなたたちのような勇気のある市民を持ったことを、誇りに思う。

投稿規定 1300字程度。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、〒530・8211朝日新聞社生活文化部「私の視点」係へ。電子メールはotai-siten@asahi.com。二重投稿、採否の問い合わせはご遠慮下さい。本社電子メディアにも収録します。原稿は返却しません。